

## ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相②

## フランスへの留学生派遣

諸井慶徳が馳せたヨーロッパとくにフランス伝道への思いは、諸井が大教会長を務めていた山名大教会所属の鎌田親彦に託されることとなる。鎌田によれば、1960年8月25日に諸井が帰国してから1週間後の9月初旬に、諸井から直接フランス行きの話があったという。それは、教祖80年祭に向けて海外布教推進が謳われた「論達第二号」が発表される前年で、その時すでに山名大教会では新たな海外布教の動きが始まっていた。また、戦後に天理教の布教目的でヨーロッパに渡った人物としては、おそらく鎌田が最初であっただろうと思われる（鎌田親彦氏へのインタビュー、2014年11月11日。以下、鎌田の証言はこのインタビューにもとづく）。

鎌田は当時、天理教校本科の1年生で、山名大教会の学生寮で舎監をし、同時に会長宅に勤めながら本科に通っていたという。卒業後の進路としては、アメリカ伝道庁に勤める、もしくは大学院に通ってから天理大学で教鞭を執るといった話があったようであるが、諸井の遺言ともなるフランス布教への思いを受けてからは、本科へ通いながら京都日仏学館の通信講座を受け始めることになった。そして1962年4月からは2年間の予定で東京の日仏学院に通うことになっていたという。山名大教会としては、フランスには永住のつもりで行ってほしいとの意向で、鎌田は教会の後継者という立場ではあったが、鎌田本人、また会長である鎌田の母も、永住について同意していたという。

この時点では、鎌田の派遣元は山名大教会であった。しかしその後、1961年には、ヨーロッパに拠点を設立することを見据えて天理教教会本部として布教師を送る動きが上がり、鎌田を教会本部から派遣したいとの意向が山名大教会に伝えられた。その後、天理教海外伝道部（現・天理教海外部）との間で派遣元をどこにするかの相談があり、中山正善2代真柱の指示で、天理教一れつ会派遣留学生という立場で派遣されることになる。

また、この鎌田の派遣に加えて、天理教海外伝道部と天理教青年会本部としても、「論達第二号」の発表を受けて、ヨーロッパに人材を派遣したいという動きがあった。その派遣先が何故パリになったのかは定かではないが、鎌田が聞いたところによれば、フランスに派遣する人材を公募したところ応募者がおらず、当時の青年会海外部長であった高橋一男の義理の弟にあたる田中健三に打診があったという。田中は、慶応大学でフランス哲学を専攻しており、本人及び教会長である父もフランス行きを承諾し、鎌田と同じく一れつ会派遣留学生としてフランスに赴くことになった。鎌田はその後、1964年11月12日に日本を出発して同年12月にフランスに到着し、田中は翌年の1965年4月に来仏した（天理教ヨーロッパ出張所 1992:10）。

ところで、当時のパリでの生活の様子はどうかであったのだろうか。鎌田の回想によれば、1964～65年頃は在仏日本人は5,000人ほどしかおらず、長期滞在者は数えるほどで、大使館のパーティー等で皆が会うぐらいの規模であったとい

う。総理府が調査した統計によれば、フランスにおける在外邦人数は、鎌田が渡仏した4年後の1968年に3,226人となっており（総理府統計局 1971:22）、この5,000人という数字は、実際の統計から見ても決してかけ離れた数字ではないことが分かる。また、パリには日本料理屋は4軒のみで、パリの学生街であるカルチュラタンに日本食品を売っている中華食料品店が1軒あったが、味噌の缶詰と醤油が置いてある程度であったという。

また、財政面については、当時は国の外貨持ち出しの規制もあり、資金面でも工夫が必要であったようである。鎌田によれば、当時は私費の留学生でも外務省の試験に受からないとフランスのビザが取得できず、外貨も許可されなかったという。運輸省が発行する『昭和43年度運輸白書』の「国民の海外渡航の状況」によれば、ちょうど鎌田が渡航する1964年の4月1日以降になってはじめて、観光渡航で1人あたり年間1回かぎり500ドル（1ドル＝360円）までの持ち出しが許可されたばかりで、その年間1回かぎりという上限が撤廃されるのは1966年1月1日以降のことである（運輸省 1968）。

鎌田は、2年間の予定でフランス留学を申請し、外貨も2年分獲得することが出来た。しかし、永住の覚悟で渡仏していたため、2年分の資金で出来るだけ長い期間、可能であれば4年間は滞在するつもりだったようで、この獲得した資金で足りない分については、旅行者の案内や通訳といったアルバイトで補ったとのことである。鎌田によれば、当時は旅行代理店もなかったので、団体ツアー等はなく個人旅行者だけであったようである。また、商社の関係者でもフランス語のできる人は少なかったため、そういった関係者が地方へ行く際に同行したり、商談の通訳などもしたそうである。鎌田は、1968年に海外伝道部の出向者という立場になるが、それまでの3年8カ月間はこういった形で生活を続けていた。

生活面については、田中健三が来るまでの約5カ月間は、水も暖房もないホテルの極めて狭い屋根裏部屋で暮らしていたという。洗面をする際には、部屋に洗面器を3つ用意し、下の階のトイレから水を汲んできて済ませていたと回想している。食事については、昼は主に学生食堂で喫食したが、朝と夕は部屋でキャンピングガスを使って料理をし、そこへよく友達を呼んで会食をしていたそうである。田中も、到着してから約10日間ほどは同じホテルの別の屋根裏部屋で生活し、その後二人で別のアパートに移ったという。

## [引用文献]

運輸省編『昭和43年度運輸白書』大蔵省印刷局、1968年  
<https://www.mlit.go.jp/hakusyo/transport/shouwa43/index.html> (2024年8月2日閲覧)。

総理府統計局編『日本の統計1970年』総理府統計局、1971年。  
 天理教ヨーロッパ出張所編『天理教パリ出張所20年史』天理教ヨーロッパ出張所、1992年。